

＜ 今日の説教のポイント 出エジプト記 16 章 13～36 節 ＞
マナを与えて下さった神様と人々のやり取りから学ぶ。

1 (13-15) 神様が「何」を与えて下さるかは私たちには分からない。

神様が与えて下さったマナについて記されています(30-31 も)。それが何か知らなかったことが強調されています(15)。マナの語源は「マンフー：これは何ですか」の「何」から来たと言われています。モーセは言います、「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである」と。私たちはこれらのことから、神様に何かを願うとき、自分が欲しいと思うものを願うだけでなく、それを超えたものを与えて下さる神様であることを思いながら願わなければならないことを教えられます。

2 (16-31) 人々がマナ集めでしたこと、そこから学び取ったこと。

今の世界を思うと色んなことを考えさせられる個所です。知恵と才覚を用い、努力して多くを獲得することは良いことだとするのが資本主義であり競争主義の考え方です。それに警鐘を鳴らしたのがマルクスであり、それはイエス・キリスト、そしてこの個所の神様ご自身にまで遡ることを思われます。人は自分の力で蓄えたとき傲慢になり、神様を忘れやすい存在なのです。しかし、人は神ではありませんから、そのような姿を取り続けると予期せぬ事態に直面することになるのです。今の世界を読み解くカギがここにあると思います。そして、ここで大事なことは、イスラエルの人々はモーセに怒られつつ、大事なことを体得していったことです(35:40 年にわたる荒れ野での旅を通し)。すなわち、神様を日々忘れず、神様が教えて下さった道を行くことが命につながるのであり、休みなさいと言われている時には休む(23, 25, 26, 29:「安息日」がここで聖書で初めて出る。次は 20:8 で、神様を覚える日)、この生き方からブレないということでしょう。

3 (32-36) 大事な事を思い出すために人が必要とするもの・モノ。

宗教改革者カルヴァンは、聖餐式の意味を説教だけではわからない人の弱さのために神様が用意して下さったものと説明しました。「**荒れ野で食べさせたパンを彼らが見ることができるため**」(32)、と主が言われた蓄えさせられたマナと同じものを覚えさせられます。イエス・キリストが私たちの罪の贖いのために十字架の出来事に架かって下さった出来事を、そのための時と場所を設け、信仰者皆で集うて皆で与りながら思い巡らす大事な時、それが聖餐式なのです。大事にしていきましょう。